

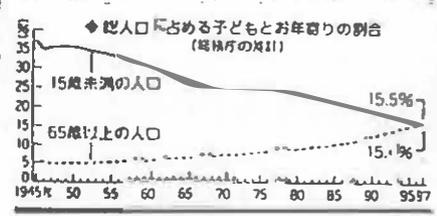
---

# I 難しい少子時代

●装画・記事イラスト・山泉和彦／装幀・高久省三

32万人減 前年比 71万人増

# 子ども 高齢者 背比べ並んだ



「子どもの日」にちなみ、二千万人超え千九百四十四万人増が四日付で発表された。人口は、増え続けている。子ども人口は昨年、四割増の増加(一九九〇年)以来初めて千九万人を割り込んだが、今年もさらにそれを下回った。これで一九八二年から十六年連続で子ども数が減り続けている。ことなる。また、八八年から千九百五十七年度の間に、配属を刷新した。年齢別では、十二十四歳の中学生の年代が四百四十八万人で最も多く、年齢が下がるにつれて減る傾向にある。少子化の傾向が年々進んで来ている。このことからも、男女別では、女子が九百五十二万人、男子は九百五十二万人、男子は男子の割合だ。年齢別(昨年十月一日現在の推計)の子ども人口の割合は、沖縄が二二・六%で最も高く、徳島は東京部の二・七%。すべての都道府県で昨年より割合が低下した。海外との比較では、日本はイタリアの二五・一%に次いで低い。水島・ドイツ一六・三%、スウェーデン一八・八%、フランス一九・四%が続く。

## (1)子どもと高齢者並ぶ

今年、平成九年(一九九七)は、多分、日本社会における子ども問題(歴史)を考えるうえで、記念(?)すべき年になると思います。その理由は次に紹介する今年の五月五日の朝日新聞朝刊の囲み記事の見出しです。

「子ども 高齢者 背比べ並んだ」

毎年、子どもの日の新聞には、その年の子ども達の現状(問題)を象徴する話題が取り上げられます。平成九年は子どもの日にふさわしく「背比べ並んだ」と表現したわけですが、いったい子どもと高齢者の何が並んだのでしょうか。囲み記事の冒頭、次のように問題が指摘されています。

『「子どもの日」にちなみ総務庁が四日付で発表した四月一日現在の全国の子ども(十五歳未満)の推計数は千九百五十二万人で、前年同期より三十二万人減少した。』

(1)子どもと高齢者並ぶ



取り上げられるのを見たり聞いたりした方は多いと思います。でも案外自分の家族は問題ないと思っている方も少なくないのではないでしょうか。それでも、高齢社会の問題については、親の介護や自分自身の老後の問題との関連で関心を持つ方は多いと思います。しかし、子どもの減少についてはどうでしょうか。

七年前の平成二年（一九九〇）に「一・五七ショック」という言葉が流行語になりました。これは一人の女性が生涯に産む子どもの数の平均値である合計特殊出生率が一・五七人になったことが原因でした。そ

六十五歳以上の高齢者人口は前年同期より七十一万人増え千九百四十四万人になっており、総人口に占める子ども人口の割合一五・五％と高齢者人口の割合一五・四％がほぼ並んだ。子ども人口の減少傾向に歯止めがかからず、少子高齢化社会の到来が加速している」

「並んだ」のは背の高さではなく総人口に占める割合です。これは、いうまでもなく並んだこと自体ではなく、子どもと高齢者の比率が逆転することを強調することが目的です。この記事が四月一日現在の推定データに基づくものであるため、既に本書が読者の手に届く頃には両者の比率は逆転している可能性が高いでしょう。今年（日本史上初めて、六十五歳以上の高齢者が十五歳以下の子どもより多くなるわけです。これが記念すべきといった理由です。それは超高齢社会への歩みの真つただ中に私たちの生活が入ったことを意味します。

でもなぜ子どもと高齢者の比率が逆転することがそんなに問題なのかでしょうか。

新聞、雑誌、テレビなどマスコミを通じて、少子社会や高齢社会が「問題として」

してそれ以後、子どもの数が激減していることが大きな社会問題になってきました。でもなぜ合計特殊出生率という舌をかみそうな名前の数値が下がることがそんなに問題になるのか不思議に思っている方もおられるのではないのでしょうか。あるいは、子どもを産む産まないは自分で決める問題、政府がとやかくいうことではない、と憤慨している方もおられるでしょう。

なかには、かつての戦争と結びついた「産めよ増やせよ」という国家の号令と重なって聞こえる年配の方もおられるかもしれません。

そこまで考えなくても、子どもが減ったといっても、それは社会全体のこと、少なくともわが家には二人いるから心配ないね、と安心していらっしゃる方はおられないでしょうか。逆に子どもが一人なので少し不安に思う方もおられるかもしれません。

結論からいえば、わが子が一人であろうと二人であろうと、さらには私のように四人であろうと、現在の日本社会で子どもを育てる限り、問題は同じです。

なぜでしょうか。この問いに答える前にもう一つ問題を提起します。子どもが減つ

たといいながら、毎週月曜日には『少年ジャンプ』、水曜日には『少年マガジン』と『少年サンデー』、金曜日には『少年チャンピオン』が駅のキオスクやコンビニエンスストアの雑誌コーナーに山のように積まれているのはなぜでしょうか。

本書の読者の中には、「マンガばかり読まないで少しは勉強しなさい」と、お子さんを叱った経験がある方も多いと思います。いくら叱つてもやめないわが子の未来に不安を覚えている方もおられるのではないのでしょうか。

これも結論からいえば、お子さんの未来を信じてあげてください。少なくともマンガを夢中で読むこと自体は、全く心配ありません。むしろ、マンガに興味を示さずに勉強ばかりしている子どものほうが問題です。なぜでしょうか。

一方で子どもの数は急激に減少しています。他方で、子どもを対象とする週刊マンガ雑誌の発行部数は、全部合わせれば一千万部を越すはずです。この一見矛盾する二つの事実の背後に、現代の子どもの育ちの世界に生じている変化と問題を読み解く鍵があります。それを明らかにすることから、私たち大人が今後子どもたちとどのよう

にかかわりあえばよいのかについてこれから考えてみます。

## (2) 巨大な発行部数

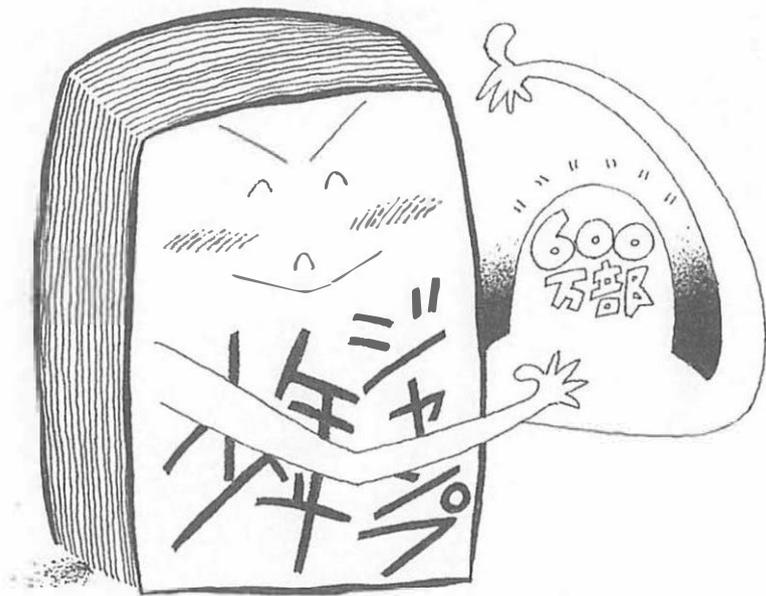
そこでまず子どもの減少の原因について述べる前に、マンガ雑誌と子どもとの関係について整理しておきます。実は、私は四年前の平成五年（一九九三）に、このテーマに基づいて、『なぜ子どもは「少年ジャンプ」が好きなのか』という本を出版しました。詳しくはこの本をお読みいただきたいのですが、その中からマンガ雑誌と子どもとの関係を最も端的に示す数字を一つ紹介します。

それは、「六〇〇万」という『少年ジャンプ』の発行部数です。

私の知る限り、少年マンガ雑誌一誌の発行部数の最高値は、平成五年正月に発行された『少年ジャンプ 五・六合併号』の表紙を飾った「おかげさまで新記録！ 発行部数六三八万部突破記念!!」という数です。ただし、このようにわざわざ正月号のキ

ャッチコピーに用いているということは、他の号ではこれより少ないということでしょう。また、翌年の正月合併号の表紙には発行部数は書かれていませんでした。さすがのジャンプもこの年をピークに減少傾向に入りました。特に最近では、再び『少年マガジン』が王座を取り返したようです。しかしここでの課題はどの雑誌が売れているかではなく、最高値の六〇〇万という数値の子どもにとっての意味です。

一般に「ジャンプ六〇〇万部」といわれるように、少なくとも平成五年をピークに、数年間のあいだ六〇〇万を前後する数の



『少年ジャンプ』が、毎週月曜日に全国の書店やコンビニエンスストアあるいはキオスクを始めとする駅の売店に積み上げられ、そのほとんどが火曜日をまたずに売り切れていたことは事実です。

一口に六〇〇万といいますが、これはすごい数です。たとえば、『少年ジャンプ』の本来の読者層は小学校高学年から中学校の男子ですが、その年齢にあたる十〜十四歳の男性人口は、六〇〇万部を突破した一九九三年時点では約四百三十八万人でした。ということは、『少年ジャンプ』発行部数は本来のマーケットを構成する全人口を超えていたわけです。明らかに『少年ジャンプ』読者層は女性も含めた少年以外の層に広がっていたといえます。

もちろん、これは『少年ジャンプ』に限るものではありません。電車の中で堂々とマンガ雑誌を広げて夢中で読みふけるサラリーマンが珍しくないように、マンガ雑誌の読者層の年齢の幅がかなり広がっていることも事実です。加えて、マンガは通常回し読みされますので、発行部数そのまま読者数ではなく、実際に『少年ジャンプ』

を始めマンガ雑誌を読んだ人の数は想像を絶する数字になるでしょう。

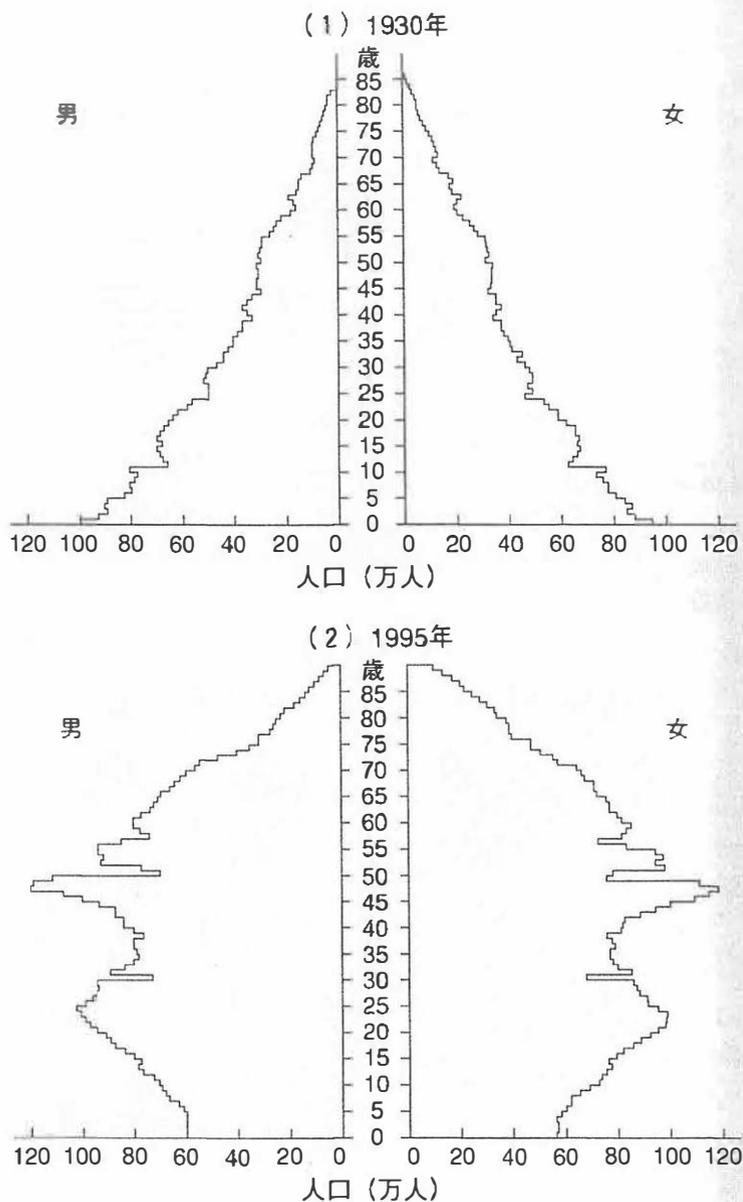
ちなみにわが家では、平成五年当時、『少年ジャンプ』を買ってくるのは小学生の次男、金を出すのは私。その一冊の『少年ジャンプ』を高校生の長男と中学生の長女と小学生の次男と次女の四人の子どもたちと私（大学教師 昭和二十四年生まれ）が奪い合って読みました。それを横目ではかにしながら見ている妻（元高校教師で専業主婦 昭和二十七年生まれ）も、昼間の空いた時間に読んでいたようです。

要するに、六〇〇万という数字の意味は、ややオーバーに表現すれば、「二十世紀末に日本という国に生まれた男子のほぼ全員が人生の一時に『少年ジャンプ』というマンガ雑誌を毎週読んで成長(?)している」ということです。

加えて、わが家がそうであるように、『少年ジャンプ』はその名に反して、女性の読者や四十代後半に入りたい大人である団塊の世代をも読者に巻き込みました。これは世代間のみでなく異世代間、とりわけ親子のコミュニケーションツールとしての役割を『少年ジャンプ』が果たしていることを意味すると考えます。そして、このこ

(3)子どもが半分になる

《図-1》人口ピラミッド：1930, 1995, 2025年



とが先に、マンガを夢中で読む子どもよりも、マンガを読まない子どものほうが心配といった理由の一つです。この点についてはあとで改めて考えますので記憶しておいてください。

さて、今でこそこのように巨大としかいいようのないマンガ雑誌の発行部数ですが、もちろん一朝一夕にそうなったわけではありません。特に昭和三十四年（一九五九）創刊の『少年マガジン』や『少年サンデー』に遅れること九年、昭和四十三年（一九六八）に創刊された『少年ジャンプ』創刊号の発行部数はわずか一〇万部でした。それが二十数年で六〇〇万部、実に六〇倍です。この間に何があったのでしょうか。その秘密を解く鍵の一つが、実は子どもの数の変化なのです。

(3)子どもが半分になる

《図-1》の真ん中の(2)図を見てください。これは平成七年（一九九五）の日本の男

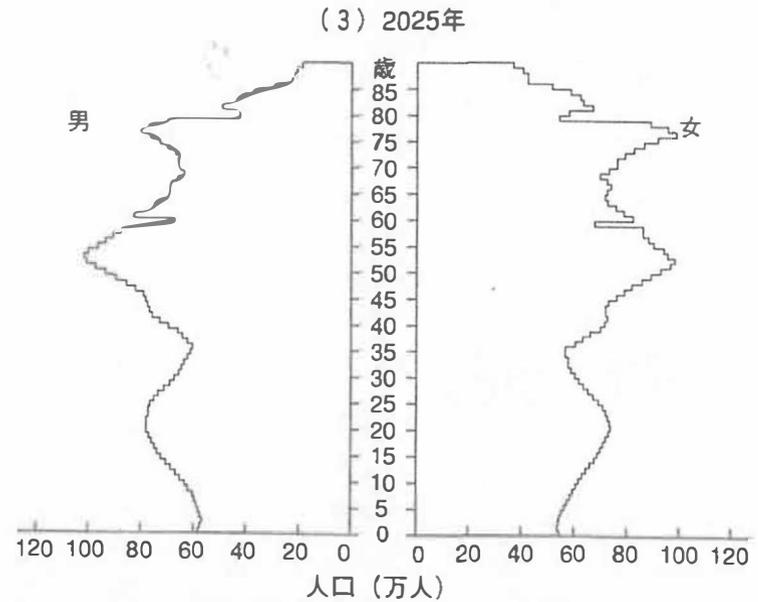
(3)子どもが半分になる

急激に下がります。人口が減少していることを意味するわけです。もともと、この図は二年前の人口に基づくピラミッドですので、二つの山は現在それぞれ二年だけ上のほうに移動しています。そして、二つ目の山の下りはほぼ垂直にしております。そのことを予想させるのが《図-1-2》です。

《図-1-2》は、昭和二十二年（一九四七）以後、一年ごとに生まれた子どもの総数を棒グラフで示し、先に紹介した合計特殊出生率を折れ線グラフで示した図です。

棒グラフのほうを見ると、昭和二十二〜二十四年（一九四七〜四九）には、毎年二百七十万人近い子どもが生まれていることがわかります。これがこれから五十代に入っていく団塊の世代です。《図-1-1》-《2》図の一つ目の山です。

この世代のあとは子どもの数が一度急激に減りますが、昭和三十年代半ばになって再び増えはじめ、昭和四十八年（一九七三）には二百九万人の子どもが生まれています。《図-1-1》-《2》図の一つ目の山です。これが現在二十代半ばになった団塊ジュニアです。《図-1-1》-《2》図の一つ目の山です。そしてこの世代のあとは再び急激に減って、終に一昨年は百十八万人になっ



総務庁統計局【国勢調査報告】及び人口問題研究所【日本の将来推計人口】（平成4年9月推計）による。

資料出所：「人口総計資料集」厚生省人口問題研究所

女別人口を五歳ごとに区切って図示したものです。一見してわかるように、日本の人口には二つの山があります。最も高い山、すなわち人口が多いのが四十代後半です。いわゆる団塊の世代と総称されている人たちです。そして、この世代の子どもたちを中心とする人口の山が二十代前半にあるもう一つの山になるわけです。これが団塊ジュニアとよばれている人たちです。

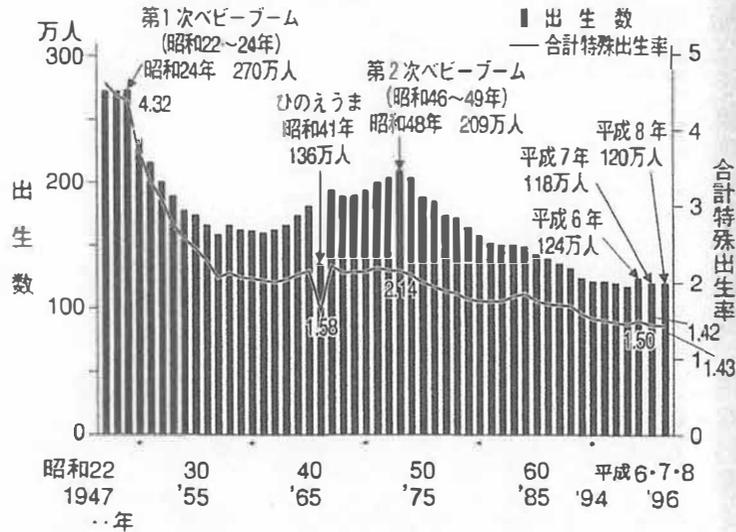
この団塊ジュニアのあと、山は

(3)子どもが半分になる

どもの数二百九万人と比較しますと、  
 $118 \div 209 \approx 0.56$ 、すなわち半分近くになっ  
 ちゃったわけですね。さらに昭和二十四年と比較すれば、 $118 \div 270 \approx 0.44$ です  
 ので、半分以下で六割近く減少していることになり  
 ます。

この傾向は現在二十歳代になった団塊ジュニアが、自分  
 たちの子どもを産む時期になるまで続くことが予  
 想されます。既に、先に述べましたように、わ  
 ずかながら平成八年（一九九六）に生まれた子  
 どもの数が前年より増えたのは、団塊ジュニアの  
 一部が親にな

〔図一2〕 出生数及び合計特殊出生率の年次推移  
 一昭和22年～平成6年一（1947～1994）



資料出所：財団法人 厚生統計協会「平成8年 最近の人口動態」より作成

てしまった、というわけですね。

次に合計特殊出生率の変化を示す折れ線グラフのほうを見て下さい。最も多く子どもが生まれた昭和二十四年（一九四九）は四・三二です。それ以後は急激に右下がりになって、人口が減少しない最低ラインとされる二・一（正確には二・〇八）の線まで減ります。しかし、昭和三十年代から四十年代にかけては、丙午の年の昭和四十一年（一九六六）を除き、二・一の線を前後する位置で平行して進むグラフになっています。それが、団塊ジュニアが生まれた後の昭和五十年代から再び右下がりになり、それ以後六十年代も減り続け、平成二年の「一・五七ショック」を経て、平成七年（一九九五）は終に一・四二になってしまった、ということですね。

もともと、昨年（平成八年）は百二十万人とやや増えましたが、親の数が増えた結果で（団塊ジュニアがいよいよ子どもを産む年代になってきたため）、合計特殊出生率に変化はないようです。

ちなみに、平成八年に生まれた子どもの数百十八万人を昭和四十八年に生まれた子

ったためとみられます。ただし、合計特殊出生率はほとんど変化がなかったため、今後大幅な子どもの増加は期待できないと予測されています。そのため、厚生省社会保障・人口問題研究所は将来推計人口を再検討し、下方修正した結果を本年（平成九年）一月に発表しました。このことについては、IIで紹介します。

ところで、このように生まれる子どもの数が非常に少なくなること少産化といえます。その結果生じる子どもが少なくなる社会を少子（化）社会とよぶわけですが、でも、それにしてもなぜ少子化が進む社会は問題なのでしょうか。

もう一度《図12》の折れ線グラフを見てください。合計特殊出生率は既に昭和三十年代に二・一を前後する値になっています。これは一人の女性が生涯に産む子どもの数の平均がほぼ二人になってから既に久しいことを示します。もともと、合計特殊出生率は、未婚の女性も含めた子どもを産むことができると思われる年齢の女性全体の平均値ですので、二・〇を切ることで日本の家庭の中に子どもが一人になったことを意味するわけではありません。それでも、昭和三十年代の半ばには、日本の多くの家

子どもが二〜三人になっていたと考える間違いはないと思います。

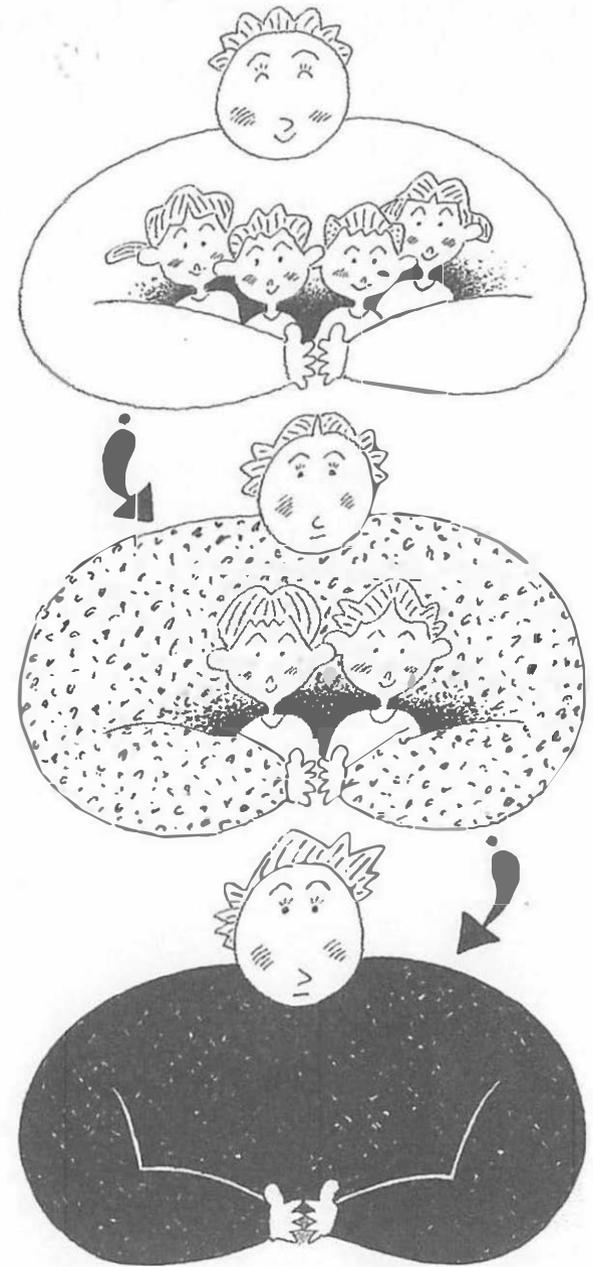
いいかえれば、日本の社会の少子化は、まず家庭の中の子どもの数が減少することから始まりました。私はこれを社会全体の少子化と区別するために家庭内少子化とよびます。この家庭内少子化は、団塊の世代以後の昭和二十年代後半から三十年代にかけて急激に進んだわけです。しかし、団塊の世代とその子どもの団塊ジュニアの数が非常に多かったために、社会全体の子どもの数はそれほど減少したようにはみえませんでした。それが団塊ジュニア以後、ということは、団塊の世代以後に生まれた少子家庭の子どもが親になって子どもを産む段階に入ったときに、いよいよ社会全体の子どもの数の減少がだれの目にも明らかになったわけです。

#### (4)なぜ少なくなつたのか(1)

以上のことから、日本の社会の少子化は最近急に生じた現象ではなく二つの段階が

(4)なぜ少なくなったのか(1)

一九八〇年前後に始まり、九〇年代の現在も進行中の社会全体の少子化です。ただし、この二つの少子化は子どもの減少という点では同じですが、その減少の理由が異なることに注意しなければなりません。すなわち、最初の少子化は、一人の女性が産む子どもの数が四く五人であったのが平均二人になったことが原因です。それに対して二回目の少子化は、子どもを産む女性の数が減ったことが原因です。まず一つ目の少子化の背景ですが、戦後日本の人口政策は、現在とは逆に「子どもを減らすこと」で始まりました。貧しい農業中心の日本を豊かな工業国に転換するため、各家庭が「貧乏人の子だくさん」から「少なく産んで良く育てる」ようになることが重要とされたわけです。そのため、昭和二十年代後半から三十年代にかけて、子どもを計画的に生み育てる「産児制限」や「家族計画」を奨励する運動が盛んに行われました。その運動の成果かどうかは別として、結果として昭和三十年代半ばには若い男女が出会ってつくった家庭の多くは子どもが二人から三人になりました。実は、一般に「工業化」が進みますと、子どもの数は減少します。



あることが理解できるはずですが。

その一つ目が、昭和三十年代に始まった少産化に伴う家庭内少子化です。その二つ目が、昭和五十年代後半から六十年代を経て平成の時代にいたる段階、いいかえれば

まず、工業化とは農業中心から工業中心に変わることですから、人口が農村から工場のある「都市」に移動することを意味します。そしてその移動（集団就職、都市の大学への進学など）した若い男女がつくった家族が「核家族」です。

さらに工業化は「高学歴社会」をもたらします。工業化を進めるには科学・技術を継続的に革新することが必要だからです。そのためには、科学・技術者を育成しなければなりません。また、だれの子どもに生まれたから偉くなるという社会ではなく、本人の実力で競争する社会にしなければなりません。これらを保障する仕組みが学校です。そのため、学校での教育をより長く、より高度にすることが求められます。戦後の日本の場合は、まず、戦前は全体の一割から二割の子どもしか進学できなかった中学校を全員が入学できる義務教育にしました。次には高等学校にもだれもが進学できるようにしました。そして大学にもできるだけ多くの人たちをいけるようにしました。

したがって、工業化、都市化、核家族化、高学歴化はすべてセットになるわけです。しかし、たくさんの子どもを夫一人の給料で大学まで出すことは困難です。子育てを助けてくれる身内は田舎にいるため、母親一人で多人数を育てるのも大変です。おまけに都市の住宅事情は良いとはいえません。

以上のような理由から、都市の核家族は「少なく産んで良く育てる」という方向に進まざるをえなくなります。日本も昭和三十年代から四十年代にかけての高度経済成長の時代に、このような家族の変化が定着しました。

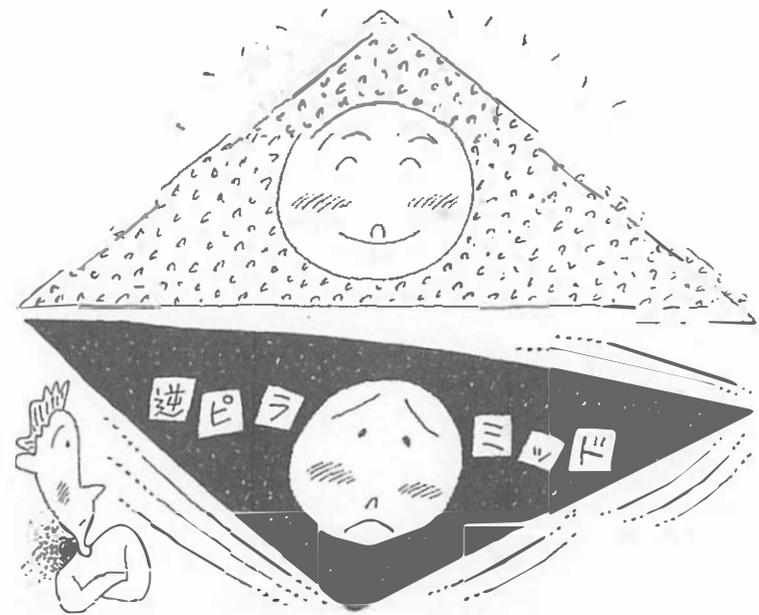
ところで、一般に合計特殊出生率が二・〇八であれば、人口は安定しているといわれます。女性の大多数が二人の子どもを産み、なかには三人産む方もいるという社会です。何らかの事情で子どもを産まない女性がいたり、亡くなる子どももいるため、二・〇だと人口が減ってしまうからです。

そして、日本の場合は、《図―2》で見ましたように、ほぼ二・一で高度経済成長の時代を乗り切りました。ですから、日本のさまざまな政策は、日本の人口が一定であることを前提にして作られています。企業活動も同様です。

(5)なぜ少なくなったのか(2)

せっかくなまくバランスがとれていたのに、なぜ二回目の少子化が生じてしまったのでしょうか。結論をいいますと、一人の女性が産む子どもの数が減ったのではなく、結婚をためらう女性が増えたからです。

一回目の少子化が生じた時代、すなわち昭和三十年代の日本では、女性はすべて結婚をして子どもを産むことが当然とされていきました。この時代は先に述べましたよう



生数のほうは、先に計算しましたように、半減しました。もしこのままいけば、団塊の世代が高齢期に入る三十年後は、今年生まれた子どもが三十歳になるわけです。最もエネルギーにあふれた三十代の人たちが半分になるわけです。そのときには団塊ジュニアも五十代です。日本の二十一世紀は老人の世紀になってしまいます。これが急激な少子化が問題にされる理由です。

(5)なぜ少なくなったのか(2)

改めて《図1》を見てください。日本的経営システムの中心にある終身雇用や年功序列は、一九三〇年(1図)の人口ピラミッドのように、豊富な若年労働力があってこそ可能な就労システムです。ちなみに一九九五年(2図)の団塊の世代より上を見てください。一九三〇年と同様にピラミッド型になっているはずですが、団塊の世代が日本の高度経済成長を支えた若年労働力であったことが理解できると思います。

ところが、二回目の少子化、すなわち昭和五十年代に入ると、再び合計特殊出生率が落ち始め、現在は一・四二。子どもの出

どもを高校は当然として、できれば大学までいかせることを目標に、とりわけ家を継ぐ長男を大事にしながら、勉強中心に育ててきたのが昭和三十年代半ば以後に子どもを生み育てた専業主婦の生き方ではなかったでしょうか。

そして、このような家庭で育った子どもたちが、大人になって結婚をし子どもを産む年代になったときに、二回目の少子化が生じたわけです。いいかえれば、現在の少子化は、昭和三十年代から四十年代にかけての少子家庭で、サラリーマンの父と専業主婦の母のもとに生まれ育った最初の世代



に工業化が進行しました。それは父親がサラリーマンになり母親が専業主婦になることを意味します。性別役割分業の世界です。男が外で働き、女が家事育児を担うという性別役割分業は日本の伝統のように思われていますが、実際には昭和三十年代から四十年代にかけての経済の高度成長とともに一般化した習慣なのです。

高度経済成長以前の日本は働いている人の半分が農業を中心とする第一次産業に従事していました。農業中心ということは、男も女も働いていたことを意味します。夫婦の一方が家事と育児に専従できるほど豊かでも暇でもなかったわけです。まさに貧乏人の子だくさん、生きることに精一杯で、次々と生まれる子どもの食べるものを用意することだけでエネルギーの大半が費やされました。

しかし、高度経済成長による豊かさが社会全体に浸透するとともに、お父さんが家の外の会社や工場に勤めて、お母さんが家事と育児を専門に担うという性別役割分業が一般化していったわけです。そしてこの時代は先に述べましたように都市化と高学歴化が進行する社会でもありました。仕事一筋の夫の生活のすべてを支え、二人の子

の女性が、結婚を拒否もしくは延期していることから生じた現象なのです。

なぜ結婚をしない(延期する)のでしょうか。仕事と家庭の両立に疑問をもったからです。あるいは、専業主婦という女性の生き方に疑問をもったからです。

専業主婦とは彼女たちを育ててくれた母親です。専業主婦としての女性の生き方を身近に見て育った女の子は、小さい頃は「お母さん大好き、お母さんみたいになりたい」であっても、一人の女性としてみるようになったとき、「お母さんの素晴らしさも苦労もわかります。お母さんのおかげで、大学を出て、仕事にも就くことができませんでした。だけど、私はお母さんのように自分を犠牲にしてまで夫と子どものために生きることができません。まして仕事をしながら夫の世話をしたり子どもを育てるのはとても無理です」と思うようになったわけです。

この世代は男女を問わず高学歴です。卒業して就職する時期は一九八〇年代、空前の好景気でした。女の時代ともいわれました。女性の職場は飛躍的に広がりました。彼女たちの母親とは異なり、仕事をするということが人生の重要な選択肢として用意

されていたわけです。

もともと、女性の高学歴化は、既に彼女たちの前の世代である団塊の世代の女性たちから始まっています。しかし、団塊の女性が卒業する時期は、未だ社会の側に女性を受け入れる体制ができていませんでした。彼女たち自身も家事・育児の担い手女性という伝統的な価値観から脱却できずに、結局は専業主婦になりました。

ところが、昭和三十年代半ば以後に生まれた少子家庭の女性は、自分たちが結婚する年齢になったときに、仕事の場合は広がっていました。しかし、残念ながらパートナーとなる男性の多くは、専業主婦の母親に大事に育てられ、仕事一筋の父親をモデルに育った長男です。一般論は別として自分の妻には専業主婦を望み、たとえ妻の兼業を認めても、自分は家事・育児を分担する気持ちも技術も持ち合わせていない男性が多数派でありました。企業のほうが、男女雇用機会均等法の後押しで総合職として採用したものの、伝統的な職場の花に見立てることはあっても、育児休暇を代表に家事・育児をしながら仕事をする女性の能力を生かすシステムやルールができていると

はいいがたい状況でした。

その結果、仕事を続けたいと願う女性であれば、たとえ恋人がいたとしても、「子育てと仕事の両立なんて大変なことは私にはできません。それでもパートナーが協力してくれば努力しようと思いますが、どうも期待できそうではありません」となり、「もう少し仕事を続けたいから、結婚も出産も先に延ばしましょう」といつているうちに、益々仕事が必要になって、「結婚はあきらめましょう」という選択をせざるをえなくなる、というわけです。さらにたとえ結婚しても、「まだ仕事をしたいから、子どもをつくるのはもう少し先にね」という女性も少なからずいるはずです。これが八〇年代に職場進出した女性たちの選んだ道です。

ところで、もうおわかりと思いますが、「少年ジャンプ六〇〇万部」は、実は二回目の少子化が顕著になる昭和五十年代後半に小学校高学年になり、平成の時代に大学へと進学する団塊ジュニアの成長とともに生じた現象であったわけです。

そして、ジャンプが六〇〇万部への道を歩むのと同じ時期に、団塊ジュニアの先輩である家庭内少子化第一世代の女性が社会に出て選んだ生き方が、結婚をしない（子どもを産まない）ということであったわけです。

しかしそれにしても団塊ジュニアはなぜ他の少年雑誌ではなく『少年ジャンプ』を選んだのでしょうか。あるいは、少子化第一世代の女性はなぜ家事・育児よりも仕事を選んだのでしょうか。

この二つの疑問を解く共通の答えを探すことから、少子社会における子どもと大人の関係のあり方について考えてみたいと思います。

## (6) 何が変わったか

まず〈図1-3〉を見てください。これは人口千人当たりに子どもが何人生まれたかを示す図です。団塊の世代は約三十四人生まれたわけです。団塊ジュニアは約十九人です。それに対して現在は九人台です。

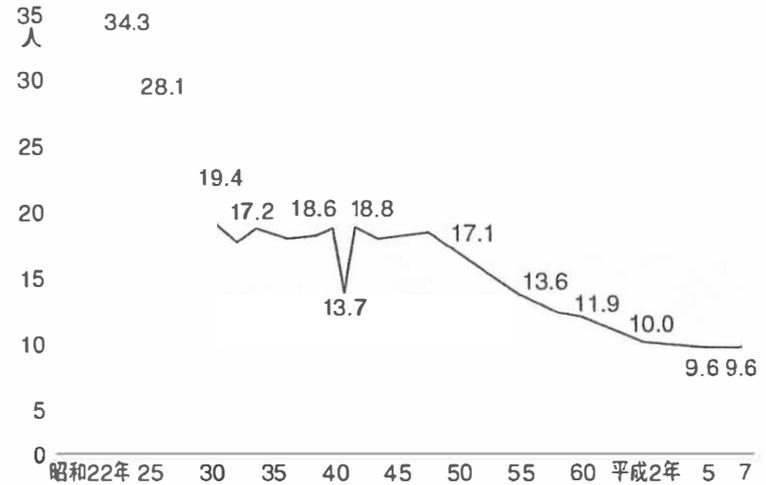
(6)何が変わったか

どもの数は、団塊ジュニアの頃とそれほど変わっていないことが明らかになっていいます。すなわち、現在の少子化は一人の女性が産む子どもの数の減少ではなく、子どもを産む女性の数が減ったことが原因です。したがって、人口千人当たりの出生率が半減したということは、子どもがいる家庭が半減しているということでしょう。それは子どもから見れば、家の中には自分も含めて二人ですが、家の外には仲間がいない、ということの意味するはずです。

要するに、家庭内少子化の時代は、団塊の世代と比較すれば、家庭の中の子どもが少なくなりましたが、子どもをもつ家庭は多かったです。団塊ジュニアの場合も、兄弟姉妹は少なくても、同様に子どもをもつ家庭はかなりあり、近所には同じ年の仲間がいたわけです。ところが、現在は家庭の中に子どもが二人というのはあまり変化していないのですが、子どもをもつ家庭のほうが少ない、その必然として家庭の外に仲間がいなくなったというわけです。

次に〈図14〉の「大学・短期大学への進学率」を見てください。

【図13】 出生率の（人口1,000対）の推移



【注】昭和48年以降は沖縄県を含む。資料：厚生省「人口動態統計」

団塊の世代は家の中にも外にも、子どもがゴロゴロいました。団塊ジュニアの場合は、一つ一つの家族の子どもの数は少なくなりましたが、その親は団塊の世代です。子どもがいる家庭はたくさんありまして、親のようにさまざまな年代の子どもたちと遊ぶことはできませんが、同じ年の子どもは近所にそれなりにいました。

しかし、現在の子どもの場合はどうでしょうか。

さまざまな調査から、結婚した女性が実際に産む子どもの平均数は二人を切ったことがなく、その意味で現在の家族の中の子

(6)何が変わったか

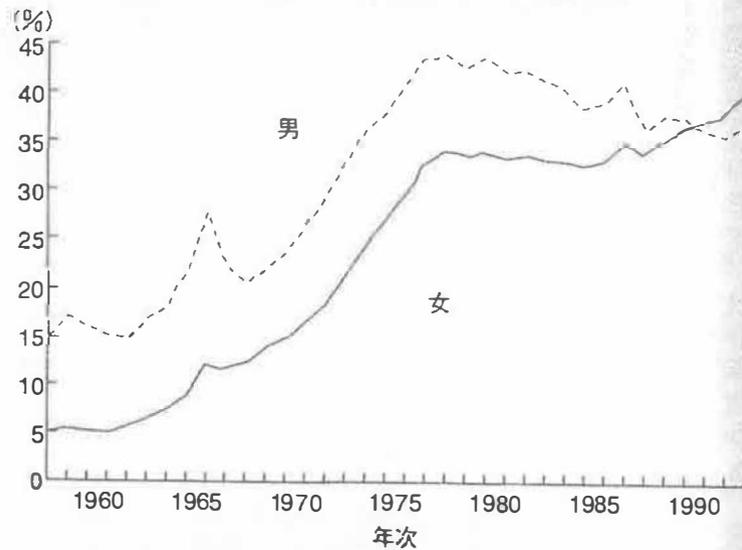
このグラフは西暦で書かれていますので西暦でいいますと、男性の進学率は、若干の上がり下がりがありますが、戦後一貫して上がり続け、一九七五年（昭和五十）から八〇年（昭和五十五）にかけて四〇パーセントから四五パーセントの間でピークに達します。その後はやや下降ぎみになり、三五パーセントから四〇パーセントの間で推移しています。

女性の場合は、一九八五年頃までは男性より約一〇パーセント低い割合で男性と同様のコースを描いて上がっていきのですが、その後は男性とは逆に下がることなく八年を境に男性よりも高くなり、現在は約四〇パーセントを超えています。短大を含んだ割合ではありませんが、男性よりも女性のほうの進学率が高いわけです。

《図一5》の「高等学校進学率と長欠率（中学生）」は登校拒否の増加、最近是不登校という言い方に変わってきていますが、それと高校進学率との関係を示しています。このグラフが示すように、昭和三十年代にも長欠児はかなりいたわけです。これは学校が嫌いでサボっている子どももいますが、親の無理解で学校へ行かせてもらえな

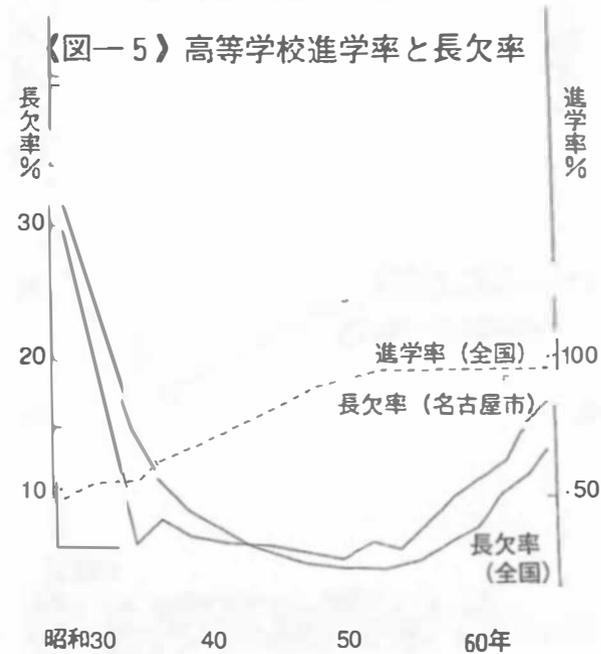
い子どもや農作業を代表に家の仕事が忙しくて学校に行くことができない子どもたちも含まれています。まだ子どもも労働力を必要とする時代でした。教師をはじめ学校関係者はそういう子どもたちが学校に来れるように、一生懸命努力しました。その結果、昭和四十年代には長欠率は急速に下がっていききました。ところが、昭和五十年（一九七五）代前半に再び長欠率が上がり始めました。これが登校拒否です。もう一つのグラフである高等学校進学率を見てください。昭和五十年頃に

《図一4》大学・短期大学への進学率



1. 文部省統計調査課「文部省統計要覧」による。
2. 大学・短期大学等への進学率：大学部・短期大学本科入学者数（浪人を含む）を3年前の中学卒業者数で除した比率。

(7)みんな高校や大学へいけるようになったけれど



滝川一廣「登校拒否はなぜ増えるのか？」  
 『別冊宝島183「日本の教育」改造案』(宝島社より)

のみでなく高等学校へ進学することはそれほど珍しいことではなくなりました。それでも普通科よりも商業科や工業科といった職業高校に進学する人が主流でした。大学進学を目指す者はわずかで、中卒あるいは高卒で多くの者は職についていきました。早ければ十五歳、遅くとも十八歳で大多数は実社会に出たわけです。

さらに、戦前の日本ではもっと早く社会に出ていきました。義務教育は現在の小学校にあたる尋常小学校あるいは国民学校のみです。その上の中学校(現在の中学校に対して旧制中学といわれますが)に入るため

ピークに達しています。ということは高等学校進学率がピークになったときと登校拒否が増え始めたときはともに昭和五十年代前半ということになります。そしてこの時期に【図-4】で見たように、日本の大学の進学率は約四〇パーセント前後でピークに達するわけです。

一生懸命努力して、ほとんどすべての子どもが高校教育を受けることが可能になり、その四割前後が大学に進学できるようになったときに、今度は子どもが学校に行かなくなってしまう、というわけです。

ここに日本の教育の悲劇があります。

### (7)みんな高校や大学へいけるようになったけれど

このような変化の意味をもう少し具体的に考えてみます。

私は昭和二十四年生まれ、団塊の世代の最後になります。私の年代から、義務教育

には試験を受けなければなりません。そして、中学に進学する子どもは少数派、ほとんどの子どもは義務ではないが尋常小学校の上に付設された二年制の高等科を出るか出ないかで職につきました。いかえれば十三歳や十四歳で社会に出たわけです。ところで、私は東京オリンピックの年は中学三年でした。昭和三十九年（一九六四）です。したがって、団塊の世代は昭和四十年（一九六五）を前後して大量に社会に出ていったわけです。高度経済成長真っ盛りの時代でした。この経済成長のピークが昭和四十五年（一九七〇）に大阪で開催された万博でしたが、その後の昭和四十八年（一九七三）のオイルショックで終わりをとげます。そしてその頃までに、中学から就職クラスが消えて卒業生の大多数が高校に進学する時代になりました。《図一五》で見たように、引き続き五十年代には大学進学率もピークに達するわけです。さらに現在では、大学進学率は四割とそれほど変わらないのですが、専修・専門学校への進学者を含めると、高校卒業後も何らかの学校に進学する率は七割前後にまで高まっています。大多数が二十歳過ぎまで学校という世界にいるということです。

いかえれば、短大や二年制の専修・専門学校であれば二十歳、四年制なら二十二歳、浪人すればその分を足した年になって初めて社会に出ることになるわけです。

そして、この高校と大学の進学率がピークになる昭和四十年代後半から五十年代にかけて、高校・大学へと進学してきたのが昭和三十年代に生まれた世代です。すなわち、少子化第一世代とは、高校進学は当然のこと、できることなら大学進学もと、親の教育熱とりわけ専業主婦の母親に叱咤しつた激励され、勉強中心に育ててきた第一世代でもあるわけです。

すなわち、家庭内少子化のスローガンである「少なく産んで良く育てる」ということとは、具体的には、親にとっては「良い学校へ入れるのが一番良いことだ」と信じて子どもを育てることであり、子どもにとっては「学校の成績が良いことが人間にとって良いことだ」と信じて育てられることではなかったでしょうか。

そして、その学校において、子どもたちは「男と女は平等である」という理念のもとで教育されました。事実、学校の成績に関する限り男女差別はなく、むしろ女性の

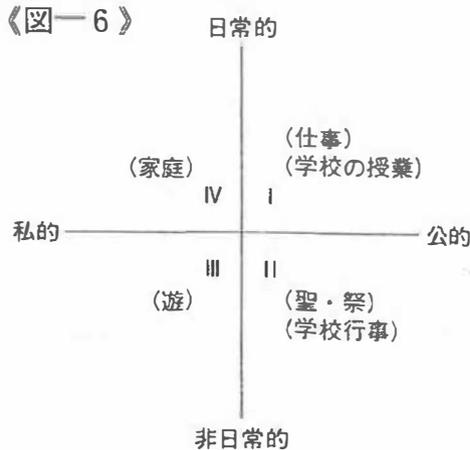
ほうが男性よりも高くなる場合もかなりあったはずですが。そして、この学校という世界の基準をもとに、優秀とされた少子化第一世代の女性が、実社会に出て働き始めたのが昭和五十年代後半、すなわち一九八〇年代です。この女性が結婚をためらったときに近年の第二次少子化が生じたわけです。他方、この高校と大学進学率がピークに達する昭和四十年代後半から五十年代前半に生まれて、二十歳過ぎてもなお多くの者が学校という世界に所属するようになる一九八〇年代（昭和五十年代後半から六十年代）に学校という世界に入っていた大量の子どもたちが団塊ジュニアです。そして彼らが思春期を迎えたときに手にしたのは『少年ジャンプ』であつたわけです。どうやら、「ジャンプ六〇〇万部」と「結婚しない女性と結婚できない男性」という二つの現象を結ぶ鍵は、学校という世界にあるようです。

### (8) 何が失われたか

今では当たり前前のように見えますが、大多数の人たちが二十歳過ぎまで学校にいるというように日本の社会が変化してからせいぜい十数年です。少なくとも、団塊の世代の多数派は義務教育+実業高校、大学卒は少数派でした。ということは、団塊の世代までの日本の社会には、二十歳前後まで学校という世界にいる男女を一人前の人間に、あるいは男性と女性として自立させるノウハウは蓄積されていなかったということです。

いいかえれば、それは親として、自分の経験をわが子の子育てに直接応用することが困難になるということでもあるわけです。

では、学校とはどういう特性をもった世界なのでしょう。か。  
《図―6》は、私たちの世界を「公的」と「私的」、「日常的」と「非日常的」という二つの軸で表現したものです。「日常的」とは毎日繰り返すことというほどの意味です。その中で「公的な世界」が「I」、「私的な世界」が「IV」です。「非日常的」はたまに行うことという意味です。同じように、その「公的な世界」が「II」、「私的な



世界」が「III」です。

「I」と「IV」が毎日繰り返される世界だとすると、「II」は「I」と「IV」が正しく繰り返されているかを確認したり修正したりするための世界です。それに対して、「III」は逆に「I」と「IV」でたまつたストレスを解消したり、発想を転換して新しい世界を創造するための世界です。

たとえば一般のサラリーマンでしたら、「日常的」

で「公的」な「I」は「仕事」です。「私的」な「IV」は「家庭生活」ということです。また、年に何回か行われる会社の特別な「儀式」や「査定」が、「公的」で「非日常的」な「II」の世界の代表です。

たまに会社の帰りに寄る駅前のパチンコ店での「遊び」が「非日常的」で「私的」な「III」の世界の代表というわけです。今はやりのリフレッシュ休暇も「III」になる

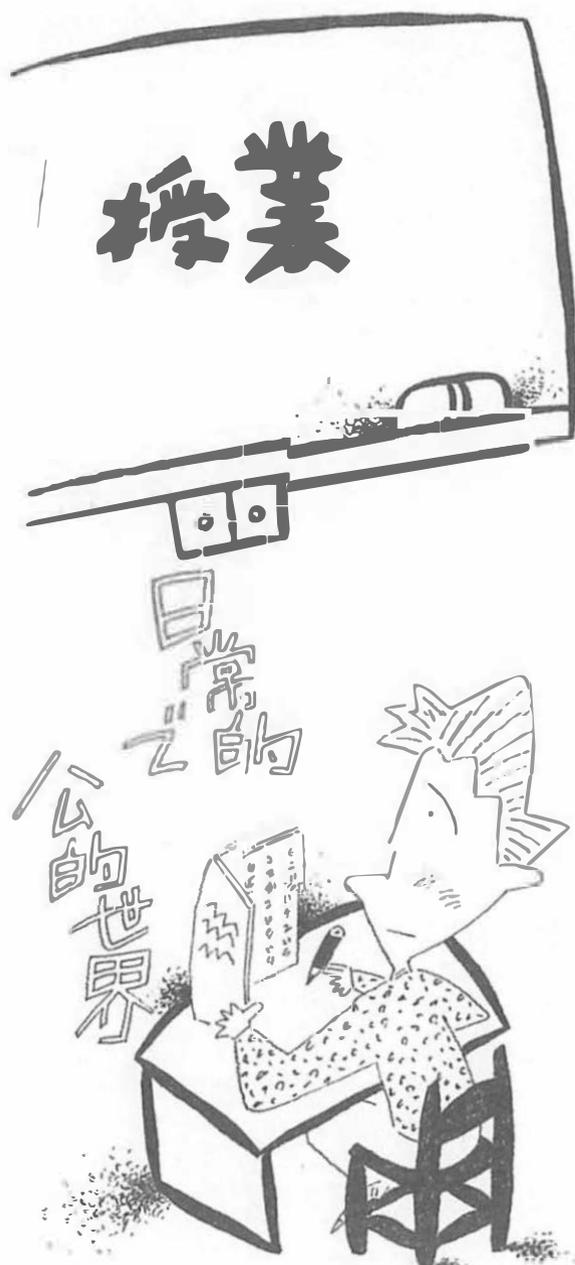
でしょう。もちろん、これは一般的な傾向で「I」がパチンコの方もおられるし、業務命令で休まなければならぬとすれば「II」になるかもしれません。

また、一人の人間としての自立という観点からこの図を見ますと、「I」の世界で一人前になることが「経済の自立」、「IV」の世界で一人前になることが「生活の自立」といえるでしょう。

このような例をヒントに、ご自分の生活がこの図の中にどのように位置づけられるか考えてみてください。

「IV」の世界がほとんどで「I」の世界が何かわからなくなる方はおられないでしょうか。「II」を何にするか迷わないでしょうか。

たとえば、子育てセミナーに参加する場合、自分の子育てを反省してよりよい親になるために参加するなら「II」、講師の名前にひかれたり、友だちとのつきあいなど、遊びの要素が強ければ「III」ということです。では「I」は何でしょうか。私見ですが、性別役割分業という社会システムを前提とした専業主婦の場合、「I」の世界は



でも「生活の自立」は全くできていないことになるわけです。  
では、子どもの場合はどうでしょうか。いうまでもなく、学校に通っている子であれば、「学校の授業」が「日常的」で「公的」な世界です。また、「家庭生活」が「日

ほとんどないといわざるをえません。

そこでこの図から性別役割分業の特性を考えてみますと、「日常的」で「公的」な世界である「I」の役割や文化を「男性」の側に、「日常的」で「私的」な世界である「IV」の役割や文化を「女性」の側に固定的に割り振る社会的な慣習あるいは社会制度ということになります。その意味では、性別役割分業の世界というのは、「男」に「経済の自立」を割り振り、「女」に「生活の自立」を割り振り、男女が合わさって初めて人間として生きる世界の全体となる社会の仕組みといえます。いいかえれば、男女いずれか一方だけでは自立できない世界ということになります。

ただし、もし女性が仕事をするようになればどうでしょうか。当然、「I」も「II」も「III」も男性と同じように必要になるはずですが。そして、「IV」はもともと女性の側に割り振られた文化ですから持っています。女性のみで「I」から「IV」まですべてそろえられます。逆に、男性の場合、もし、洗濯や料理のみでなく、布団の上げ下げから着替えまですべて奥さんの手を煩わせているとすれば、「経済の自立」はでき

常的」で「私的」な世界ということになります。「非日常的」な世界では、「遊び」が「私的」な世界の、「学校の儀式」が「公的」な世界の代表でしょう。もちろん、「I」が遊びになる子どももいると思います。成長の度合いによっても異なるはずです。

ただし、「遊び」が「III」であるためには、「私的」である以上、親の目からも、教師の目からも離れた子どもたち自身の世界であることが重要な条件であることを強調しておきたいと思えます。

ところで、学校は「I」と「II」の世界が中心です。休み時間に遊びがあっても、それは「I」のための休息であって、重要なのは「I」です。「III」と「IV」にかかわることは学校の外の世界の問題と位置づけられているはずです。したがって、子どもたちの世界において学校の重みが増すということは「I」と「II」が増えて「III」と「IV」が減少するということです。

このように考えますと、学校は子どもが大人になって一人前の人間として自立する上で必要な「I」の世界、すなわち「経済の自立」の世界の準備はできても、「IV」

の「生活の自立」はできないことになります。しかし、もし家庭での生活が学校の予習・復習あるいは塾での勉強が子どもの学校の外の時間と空間を占めるようになるのであれば、子どもは実質的に「III」と「IV」の世界を失うことになりはしないでしょうか。いったいどこで子どもは「生活の自立」のための力を身につけるのでしょうか。

さらに問題があります。一応は、学校によって「I」と「II」の世界で生きるための力を身につけることができれば、「経済の自立」はなんとかできます。しかし、同じ「I」の世界であっても、子どもが学ぶ学校の世界と大人が働く仕事の世界では性格がかなり異なるのではないのでしょうか。

学校は教師が教室で教科書を時間割にしたがって教える世界です。時間も場所も内容もすべて前もって決まっている世界です。全員が同じようになることが良いとされる世界です。正しい答えは必ず存在し、それも一つである、という世界です。

この学校の世界と比較的似ているのは規格化された工業製品を流れ作業で生産する工場労働です。学校は農業中心の社会を工業中心の社会に変えるためには非常に合理



要するに、現在の学校での勉強は、それを教わった子どもたちが大人になって「経済的自立」のために仕事をするとき、あるいは「生活の自立」をする上でも、いずれの場合にも必要になる知識や技能や態度を身につける上でどれほど役に立つかは、非常に疑問……ということなのです。

### (9)自立のために必要な力は

少し難しくなりました。具体的に考えてみましょう。

学校へ通っているお子さんがいる方は教

的な教育制度というわけです。

しかし、現代の工場での生産はロボット中心の世界に変化しているはずですが、その傾向は益々強まるはずですが。人間の職場は生産ではなく人と人がフレキシブルに交わる世界が中心であるはずですが。その代表が生産された物を売買することにかかわる営業活動です。これは人間しかできません。

ただしそれは相手のある世界、自分ではなくお客の都合が優先される世界、時間も場所も流動的、値段は交渉によって変化する、理不尽な横やりで積み重ねてきた交渉が壊れてしまうこともある、唯一正しい答えなど存在しない、答えは自分でつくらなければならぬ、というわけです。教科書とは正反対の世界です。

このような世界に貫かれているのは、多様な要素が相互に影響し合っていて刻々と変化する確率的な世界です。ベストではなくベターを求める世界です。だれもが共通してもっている教科書の答えではなく、その人にしかない個人的な魅力が優先される世界です。

科書を見てください。そして、そこにある問題を解いてみてください。多分、小学校四年生以上の子ども教科書であればつまずくところが出てくるはずですが、それでも小学校の場合は何とかこなせても、中学校の教科書の場合には、ほとんどの方が自分で解ける問題を探すのが困難でしょう。

その理由は、小学校四年生あたりから学習する内容が、生活に直接関係する具体的なモノの世界から抽象的な論理の世界に変化してくるからです。その代表が分数です。 $\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$ の答えはすぐわかっても、 $\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$ の答えにはとまどう方もおられるのではないのでしょうか。分数を約分するということは日常の生活ではほとんど存在しないからです。分数計算の多くは抽象的な思考の世界の問題だからです。

同様に、中学校以上の内容は、少なくとも私たちが生活や仕事をする上で日常的に必要な知識がただだけあるでしょうか。微積分どころか因数分解さえも、大人になって日常的に使用する人がどれだけいるのでしょうか。もちろん、小はカード型計算機から大はさまざまなコンピューターを内蔵した機器にいたるまで、気がつかないところ

ろで応用されていることは否定しません。でもそれを知らなくても家庭生活でも仕事の上でも困ることはほとんどないはずですが。

唯一困るのは中学生になった子どもに聞かれたときではありませんか。

もちろん、九九を代表に学校での勉強が私たちの現在を支えていることは否定できません。このように私が自分の考えを表現し、それを聞いて（読んで）理解してくれることも学校において学んだ文字が基礎になっています。

さらに、単に言葉や計算のための知識だけではありません。講演会に参加したときのことを思い浮かべてください。たとえば話がへたで面白くなくても、一時間以上も講師の話の話を黙って聞くという学習者としての態度、あるいは時間どおりに集まるという習慣、これらは学校という世界に長期間学んだことによつて培われた態度や習慣であるはずですが。そして、このような態度や習慣が、現在の工業化された豊かな日本を築く上で非常に重要な役割を果たしたわけです。その意味で、日本の学校は、世界でも優れた教育システムであり、最もレベルの高い教師集団によつて担われていること

(9)自立のために必要な力は

の学習がどれほど役立っているでしょうか。もし、役立っていれば教科書を見てとまどうことはないはずです。

ところで、余談ですが、私は子育てというのは「子どもを自分からいかに離すか」ということだと考えています。いいかえれば、子どもが成長するということは「親から離れていく」ということです。そのため、私はこのことを強調するレトリックとして、「子育てとは子捨てなり」と表現します。子どもを何のために育てるかといえば、子どもを捨てるためです、というわけです。このように表現しますと違和感をもつ方もおられると思いますが、大事なものは、自分がいなくなったときに子どもが一人で生きていけるための力をいかにつけるか、ということが子育ての目的である、ということです。子どもは親の生き甲斐のためでも家の跡取りでもなく、老後の保護者でもないということなのです。

それでは、子どもを捨てる準備、子どもから離れようとする準備はいつ頃から始まるのか。それを見分ける最も簡単な方法が、子どもの教科書を見て、わからないとこ

は強調しておきたいと思います。しかし、それだけにマイナス面もあるわけです。特に、中学校以上の知識の内容については問題が大きいと思います。私のような研究者、あるいは行政官僚、医者、弁護士など、法律や科学的知識を操作する職業では、現在の学校で教える知識はある程度有効です。職業で生かすことができます。しかし、自分の才能や肉体を生かした仕事、あるいは先に述べましたように営業活動に代表される仕事にはあまり役立たないはずです。何よりも、母親や父親として子どもを育て家事を行う上で中学校以上の学校で



ろが出てきたとき、というわけです。先に述べましたように、小学校三・四年くらいになると、教科書を見て一瞬とまどうところが出てくると思います。小学校を卒業して以来、ほとんど使っていない知識が出てくるからです。

もう一つ理由があります。小学校三年から四年にかけては子どもが子どもではなくするための準備に入るときだからです。教科書の内容が抽象的になることも、抽象的思考が可能になるという意味でその現れの一つです。もう一つ別の現れがあります。男の子が男に、女の子が女に変わるための準備です。もちろん、一般的には思春期はもう少しあとですが、子どもたちの身体と心の内面では確実に変化が生じています。

ですから、親のほうもその頃から、「この子は自分の子どもではなくなるんだ」と覚悟をして、子離れの準備をする必要があります。「可愛い○○ちゃん」ではなく自立した男性の「○○」、女性の「○○」として、自分たちの家庭からわが子を「巣立」たせることが子育ての目的になるわけです。だから「子育ては子捨て」ということになるわけです。

そして、自立とは平たくいえば自分のことは自分でできるということです。自立した一人前の男と女ということは、まず実社会に出て経済的に自分の稼ぎで生活できるということですが、「経済の自立」が必要条件の第一です。さらに、お金があっても実際に日常的に食べるものを作らなければなりません。着るものを洗濯しなければなりません。部屋の掃除も必要です。いくら外食産業をはじめサービス業が盛んでも、これらすべてをお金で賄<sup>まかな</sup>おうとすれば安月給ではすぐ破産します。加えて高カロリーのファーストフードばかりでは栄養過多(?) になってしまおうでしょう。「生活の自立」がもう一つの必要条件です。

すなわち、男女の性にかかわらず、「経済」と「生活」の双方とも「自立」することが、これからの社会を一人の人間として生きてゆくための必要条件です。

では、男と女として自立するための十分条件とは、なんでしょう。人生のパートナーを見いだし、新たな家庭をつくり、子どもを育てることができる意欲と技能、これが私の考えです。もちろん、結婚しない生き方や女性のみで子どもを生み育てると

繰り返しますが、学校で教えてくれるのは、大人になって現実に経験する世界の内容ではありません。もともと学校は子育ての技術を教えるために制度化されたわけで

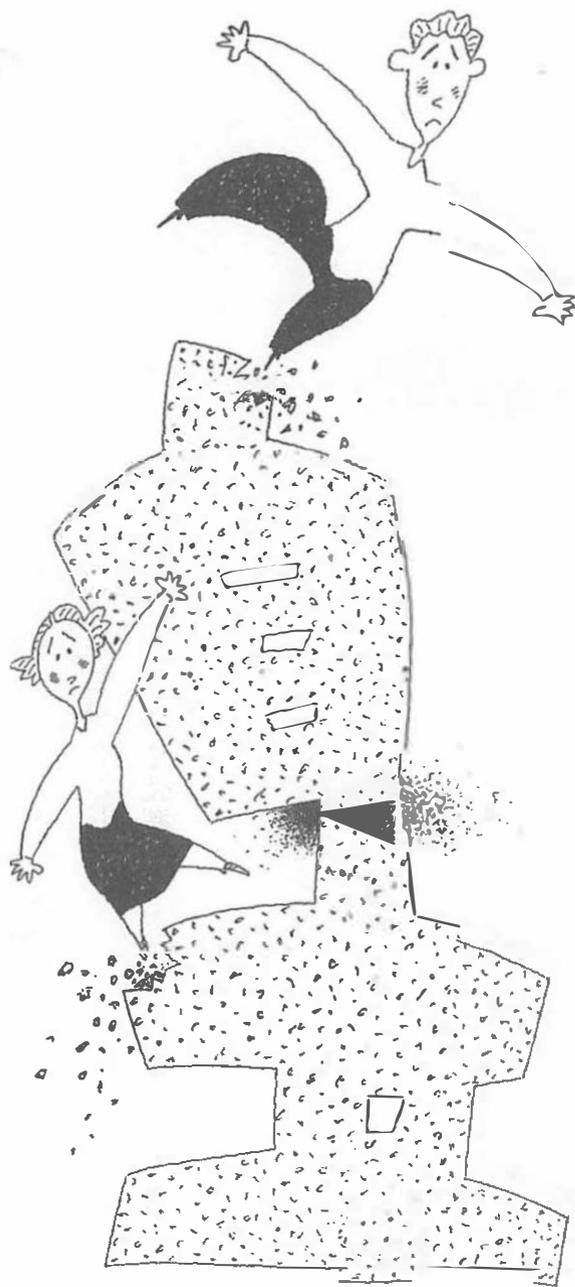
### (10)男女の自立への道は

しかし、残念ながら、「経済」「生活」いずれの自立にも、また、「人生のパートナー」を見いだす意欲と技能の育成においても、学校という世界が適していないことは、これまで述べたことで理解できると思います。

いいかえれば、学校の世界が広がれば広がるほど、子どもは一人の男もしくは女として自立するための世界を失う危険性があるということです。

その意味で、だれの子どもであれ、だれと共に生きるにせよ、新たな生命を男女が共に生み育てることが、一人の男性と女性として自立するための十分条件だと考えます。

生き方もあると思います。血縁以外の子どもを育てるという生き方もあると思います。家庭のあり方もさまざまだと思います。しかし、どのような形態であれ、男女の性差は互いの性的交渉を通じて新たな生命を生み育てることが前提にあると考えま



はありません。先ほどの図式でいえば、子育ての技術は「IV」の世界に必要な知識や技術です。それは学校ではなく家族と生活する過程で経験的に獲得するものでした。たとえば、いわゆる貧乏人の子だくさんの時代は、自分の兄弟姉妹や近所の子どもとかかわる(遊ぶ)ことから獲得できました。就職した奉公先の子どもを実際に育てることから、子育てを経験することもできました。

それに対して、豊かな少子家庭では、家族の中の子どもは自分以外では年の変わらない兄弟姉妹が一人いるかどうか、あとはみんな自分を育ててくれる大人です。家の外には仲間がいない。学校には仲間がいるものの親しくつきあうのは同年代の子どもか教師、その人間関係は非常に限られます。

少子社会に育つ子どもは、成長とともに生物としては子どもを産む体に変化するけれども、その子どもをどのようにして生み育てるかという技術や心を学び取るための経験を積む機会がほとんどないままに大人になってしまいうわけです。生まれて初めて抱く赤ちゃんが自分たちの子ども、という若いお父さんやお母さんばかりになる、と

いうことです。

ところで、団塊の世代は子育ての経験を持つ最後の世代でしょう。しかし、その子どもである団塊ジュニアに対しては、学校という世界を優先させてきたはずですが、論的には先の図式の「IV」の世界、すなわち学校を離れた日常生活があるはずですが、現実には、多くの家庭では、子どもが学校に入学するということは、「IV」の生活の場に「I」の学校の文化が入ってくるということではなかったでしょう。

普段の生活をふりかえってみてください。子どもが学校から帰ってくると、なんというでしょうか。「おかえり、宿題は?」「塾は?」「ピアノは?」、と問いたただき(?)習慣がないでしょうか。もしあるとすれば、学校という世界がもっているルールを、家でも繰り返していることになります。

もう一つ例をあげましょう。お子さんが小学校に入るときに机を買ったと思います。私の家庭でもそうです。ただし私自身は入学したときに買ってくれたのはランドセルでした。このランドセルと机の違いが大きいのです。



学校は勉強をするところ、ランドセルは勉強道具を学校へ持っていく入れ物です。机は違います。学校ですればよいはずの勉強を、家でもさせるための道具です。

ランドセルのみの時代の子どもは、ランドセルを降ろすことで、「IV」の「家庭生活」や「III」の「遊び」の世界に戻ることができました。そしてその中で、学校では教えてくれない、あるいは学校では禁止されているが大人になってから役に立つ知識や技能を身につけることができたはずですが、それが家庭に机が入って来ることによって、それも学校の机よりもっと立派な机によ

って、家庭と学校は同じ世界になってしまいました。物理的空間的には移動したとしても、学校のルールが机にくっついていてからです。

さらに、子どもが学校でも家庭でもないと行こうとしても、塾やお稽古事けいこごとの世界が待っていないでしょうか。いずれも学校と同じ世界です。大人が教える世界であり、子ども同士が互いに学んだり遊んだりする世界ではないからです。サッカーや少年野球も同じです。遊びではありません。大人が作ったルールにしたがって、大人が訓練し競争させる場である限り、学校と同じと考えます。

子どもにとって遊びの世界とは、大人の目が届かない世界です。学校でも家庭でもないところで、子どもたちが互いに共に生きていくためのルールを身につける場が遊びです。あるいは、家庭や地域社会での日常生活は、大人になったときにどのように生きていくかということ学ぶところです。

子どもの世界が学校中心になり、それ以外の世界が学校の影響下に入ってしまうということは、このような学びの機会が失われることです。

それでも、小学校低学年から中学年くらいまでは、学校の勉強もそれほど厳しいわけではありません。大人の目があるとはいえ、子どもたち自身の世界もそれなりに保障されています。

問題は思春期です。思春期とは、それまで自分をつくってきた周りのものを一度否定して、改めて問い直すことから、自分なりの生き方を見いだすために悩むときです。自立への苦しみです。そのときに、自分が男あるいは女であるということが非常に重要になるわけです。

中学生の頃を思い出してみてください。自分なりの生き方を求めるとき、その中身は男あるいは女としてということが重要であったはずですが。

しかし、学校という世界は、人間の文化はあっても男と女の文化はありません。たとえあったとしても、表には出せません。人間を育てるところであつて、男と女を育てるところではないからです。基本的には、学校は男女平等が建前です。ただし、それはあえていえば、男性と女性という性差を前提とした平等というよりも、「女性も

男性と同様に扱うべきである」という意味ではないでしょうか。いいかえれば、学校は男女平等であることによつてすべてに男性の世界のルールが平等に適用されるといえないでしょうか。

もちろんこの場合の男性とは生物としての男ではなく、少し固い表現ですが権利の主体としての男です。人間としての権利、いわゆる人権として男女は平等という次元から、女性は男性と同じように扱うべきである、というのが学校的世界の男女平等の意味です。

このこと自体は非常に重要なことで、学校の世界が他のどの社会よりも優れた面です。しかし、それは同時に、生物としての性差を積極的に取り入れて、男の子が男になり女の子が女になっていくときに何が必要かということを教えることを、学校は非常に不得手であるということでもあります。だから性教育が苦手なのです。

少なくとも、現実に人生のパートナーを見いだし、子どもを生み育てるための意欲と技術の教育という意味では、学校が行う性教育はほとんど役に立たないはずですが。

性交、受精、受胎などの科学的用語を教えることはできても、恋人をみつける手練手管や化粧技術、あるいはセックスの方法や子育ての技術などを具体的かつ実践的に学校は教えることは絶対できないはずですが、パートナーを見いだし、子どもを生ま育てる上でどちらの知識や技能が重要でしょうか。

それは学校ではなく、他の世界で学び取る知識・技能・態度であるはず、と学校の関係者はいうと思います。そのとおりです。実際に、かつての社会、それは繰り返しますが貧乏人の子だくさんの時代ですが、義務教育を終えるかどうかの思春期真っ盛りに、実社会に出た十三、四歳の少年(?)は、悪い先輩に手ほどきを受けたと思います。奉公先の奥さんとその子どもから、経験的に学び取った十三、四歳の少女(?)も多かったと思います。先の図式でいえば「III」と「IV」の世界です。

あるいは、先に述べましたように、団塊の世代までは、自分の成長する過程でなんらかの経験的な学びの機会があったはずですが、学校という「I」の世界とは異なるルールで進行する「II」と「III」と「IV」の世界が子どもたちの世界にあったわけです。しかし、団塊の世代以後に進行する急激な少子家庭化と高学歴化は、子どもの「I」のみでなく、他の三つすべての世界に学校のルールが浸透する過程でもあったといえるでしょう。

ただし、子どもたちも負けてはいませんでした。大人と学校のルールをいかくぐつて、自分たちの世界を見いだしたわけです。

それが『少年ジャンプ』に代表されるマンガの世界であったわけです。





で学校が入り込んでしまった社会で、子どもが男と女として自立するための意欲や知識や技能を学び取る世界として見いだしたのが『少年ジャンプ』である、というのが私の考えるジャンプ六〇〇万部の基盤なのです。

## (II) ジャンプワールドの秘密

『少年ジャンプ』を代表に、少年マンガ雑誌の世界とは、男の子が男と女のルールを学ぶ世界なのです。男の子が男になるときに何が必要なかを教えてくれる教科書がマンガ雑誌なのです。さらに、男女の性差を超えて、一人の人間として子どもが大人になるときに何が必要なかを教えてくれる教科書です。

もちろん、子どもがこのような目的をもって、教科書としてマンガ雑誌を買って読んでいるという意味ではありません。しかし、最初に紹介したジャンプ六〇〇万部発行という事実の意味と、これまで述べてきた少子社会に育つ子どもの現実とを重ね合わせて考えたときに、私はこのように判断したわけです。

この詳しい説明は、私の『なぜ子どもは「少年ジャンプ」が好きなのか』を読んでいただきたいのですが、要するに、地域社会がなくなり、子どもに日常生活の隅々ま

ところで、ジャンプを子どもが選んだのはわかるが、ジャンプもまた大人が作っていることに変わりがないのではないか、と思われる方も多いと思います。そのとおりです。ただし、その作り方において、大人ではなく子どもの都合を優先する工夫がさまざまあるわけです。安価でコンパクトなマンガ雑誌メディアの特性をフルに生かしたことです。

団塊ジュニアが読み始めた頃は百五十円、今は二百円前後、いずれにせよ小遣いをまとめてもらえる小学生でも一週間に一冊程度なら買うことができる値段です。また、たとえ親が読むのを禁止しても、通学途中や勉強部屋での宿題の合間というわずかな時間と場所さえあれば、隠れて読むことができます。おまけに、親の団塊の世代はマンガ第一世代、正面きって叱ることはできません。もつとも、親のほうは（私のことでもありますが）、ジャンプではなくマガジンですが……。

内容面でも工夫されています。ジャンプワールドの特性である『少年ジャンプ』のコンセプトは「友情・努力・勝利」です。この三つの言葉は、考えてみればいずれも学校教育が大事にしている価値です。しかし、学校の中では、この言葉どおり実践することはできないはず。たとえば、「友情」の重要性を否定する学校はないと思いますが、試験のときに問題の解けない友だちに教えてあげたら、どうなるでしょうか。本当に困っているときに助けてあげるのが、友情ではないでしょうか。あるいは、「努力」したからって、すべての子どもが満点になるわけではないことを子どもたちはちゃんと知っています。何よりも試験は皆が「勝利」するためではなく、順番をつけるためであることも知っています。

問題は三つの価値がどのような社会的文脈のもとで具体的に展開されるかです。

また、『少年ジャンプ』に限らず、マンガに対する親とりわけお母さん方の非難あるいは心配の種はエロチックな描写や暴力的な表現だと思えます。確かに、エッチなマンガがあります。しかしよく読んでみてください。すべて純愛です。表現としてはエロチックでも、行為は真面目です。どちらかといえば古典的な純愛物語がほとんどです。暴力についても表現は過激ですが、それは背景のようなものです。ストーリー



や主人公が発する言葉は、極めて真面目です。読んでいてむずがゆくなるくらい大まじめに「友情・努力・勝利」の価値を真つ正面から語り行動しています。嘘と思っただら読んでみてください。

このように、表現される内容の差だけではなく、その伝え方においてもジャンプワールドは学校とは異なる特性をもっています。

学校が教える知識は概念としての知識です。学校は知識を具体的な経験を通じて子どもたちに身につけさせることはできません。要するにやってみることはできないわけです。もちろん、マンガも紙に書かれた世界である以上、実際に経験できるわけはありません。しかし、マンガの世界は口語(話し言葉)の世界です。吹き出しの中の言葉はすべて口語です。話し言葉は具体的な日常の世界につながっていきます。マンガは絵と話し言葉によって、読者の日常生活と直接交流することが可能なわけです。とりわけ『少年ジャンプ』はその編集方針として読者カードを重視します。また新人作家を用いることにより、読者である子どもたちの世界を描くことに挑戦し続けて

きたわけです。その詳細については、もうここで語る余裕がありませんので、興味のある方は申しわけありませんが私の本を読んでみてください。

最後に結婚しない女性の問題について述べておきます。

### (12)女性が産まない理由

先に述べましたように、団塊ジュニアの先輩である少子化第一世代の女性が就職するようになったのが一九八〇年代です。もう一つ上の世代である団塊の世代の女性た

ちは、仕事をしようと思っても仕事がなかったし、古い母親の体質を受け継いでいました。しかし八〇年代は女性の労働市場が開かれました。

少子化第一世代の女性すなわち昭和三十年代半ばに生まれた女性の多くは、専業主婦の母親とサラリーマンの父親のもとで育ちました。ただし、未だ旧来の習慣が根強く、家庭では男の子が中心で、女の子は二次的な存在であったはずです。「女のくせに」とか「女らしくしなさい」という言葉が飛び交った時代です。要するに、母親から女の子は家事をしなければならぬといわれて育った世代です。

しかし、その一方で、高学歴社会に入っています。学校では男女平等で育ち、女性も大学へいくことが当然とされるようになった最初の世代です。成績でも男性に負けることのない世代です。そして卒業したら一九八〇年代の好景気にぶつかります。社会的にも「女の時代」といわれ積極的に進出することが称賛されました。経済のソフト化といわれ、カタカナ業界を代表にサービス関連業種が多様になり、仕事も面白くなりました。

ところが、結婚を考えようとして相手の男性をよくみれば、専業主婦に大事に育てられた長男ばかり。女性のほうは、そんな母親に反発しながら自分なりに勉強をし、仕事をしてきた自立志向です。合うわけがありません。

職場自体にも問題がありました。結婚をして子どもを産んで仕事を続けていくには、パートナーが子育てや家事に対等にかかわってくれなければやっていけません。しかし、どうもマザコンの長男にはそれを望めそうにない。加えて、女性に門戸は開いたものの、職場は未だ男中心。専業主婦の女性が背後にいて可能になる仕事の仕方が標準、まして女性が仕事と家事を両立することを奨励する仕組みも保障ありません。

現在のように育児休暇制度が法制化されても、昇給や周りの目が気になって取るに取れない状況があるわけです。一九八〇年代は制度もないわけです。もし結婚すればすべてが女性の負担になるわけです。おまけに仕事のほうが面白いとなれば、あえていま結婚することはないわ、となっても不思議ではないわけです。

ただでさえ少子化第一世代ですので、人口規模が小さいわけです。それが子どもを

産まないわけですから、当然少子化が進行するわけです。

ところで、人口学者は九〇年代半ばから、ということはもうその時期に入っているのですが、出生率が上がるだろうと予測してきました。その理由は、結婚を延ばしてきた女性が結婚し始めるだろうということと、団塊ジュニアが婚姻年齢に達するからです。実際に、先に述べましたように、団塊ジュニアの参入によって、昨年生まれた子どもの数は前年より増えました。ただし、増えたといってもわずか二万人、合計特殊出生率のほうは上がりませんでした。その意



味で、今年か来年に急激に出生率が上がるようであればよいのですが、そうでなければ、根本的に考え直さなければなりません。上の世代を見ていて、団塊ジュニアも結婚しないとになったら、大変なことになります。もし団塊ジュニアが子どもを産まなくなったら、日本の人口ピラミッドは完全に逆三角形になってしまうからです。

そうになると、子どもの人口が半分になり、学校が半分になり、塾がつぶれます。このままでも、昨年生まれた子どもが大学を受験するときは、七割以上が入れます。一昨年のデータですが、リクルートの予測では二〇〇九年には大学全入時代になるそうです。深刻なのは高校です。今でもほぼ一〇〇パーセントの進学率ですから、高校が余ってしまいます。今後、どこを減らすかが大きな問題になるはずです。数年前から文部省が偏差値廃止を唱えているのは、こういう前提があるからです。

学校は一人ひとりの子どもを丁寧に育てていかなければならなくなります。先生は選ぶ側から、選ばれる側になります。東大は残るでしょうし、大企業に入るためには、良い大学にいかなければならないというのは変わらないでしょうが、現在のような学



でも、何があってもメゲずに生きていける、あえていえば厚顔無恥な子どもです。でも、こういう子どもは学校では一番だめな子どもとして扱われがちです。こういう子どもを育てるには、親が手を離さなければなりません。だから、子育ては子捨てなん

歴社会は崩壊するでしょう。なぜなら、良い大学に入って、良い企業に入っても、楽はできませんから。もうすでに企業内では、ポスト不足で、学歴があっても出世できません。ヨコの労働移動も始まっていきますから、終身雇用も壊れつつあります。また、学校の知識が役に立つ職業というのは、先に述べましたように、弁護士にしても医師にしても、決まった知識を操作する職業です。しかし、これからは、決まった知識は崩壊し、クリエイティブな能力が問われます。あるいは、大人になって必要なのは仕事と生活の両方の能力です。女性は両方培ってききましたが、男性は片方しかできないことも述べました。女性は男性がいなくても生きていけるけれど、男性は女性がいなければ生きていけないわけです。だから、男性は女性に見限られたわけです。

男性の自立、これが今後最大の課題です。男は、学校の勉強さえできれば生きていけるといふ幻想の中で生きています。しかし、学校の外の社会はそんな甘いものではなく、クリエイティブな能力が必要になります。一番強いのは、どんなところへ行っ

です。繰り返しますが、これから最も必要になる能力は人間交渉能力でしょう。それと、男と女の関係能力です。いずれの能力もこれまでの学校教育が苦手としてきた世界です。学校に代わってマンガの世界が培ってきた能力です。

これが、一番最初にマンガを読まずに勉強のみしている子どものほうが心配だった理由です。

もちろんマンガも所詮はメディア。子どもたち自身がつくる世界ではありません。マンガという閉じた世界ではなく、子どもたちが少々の危険というコストを払ってでも、大人の目が届かない場、互いに学び合い教え合える世界をいかに用意できるか。それが少年ジャンプ六〇〇万部を通じて、あるいは一〇〇〇万部以上のマンガ雑誌全体を通して、子どもたちが私たち大人に要求していることであると考えます。

もしこのメッセージの意味を読み間違えると、少子化が益々進行し、日本の豊かさは根元から折れてしまうことを強調して第一部を終わります。

## Ⅱ 新しい親子の世界